弱き者の求むる平和、
そは唯言葉、唯文字、
長き平和　遂に來たらじ。

暴きを懲す　強き力、
亂を治むる　威き力、
強く　猛けき　我ならずして
降魔の任に　誰れあたる？
あはれなる人の子の爲め、
妖しき雲を　遠く　かい遣り
黑き　眞暗き　暗夜を破り、
地上の子等に　光明を與へ、



堅く　冷たき　氷を融かし、
地上の子等に　温暖を與へ、
我が鉾　劒　弓矢もて
平和を布かん　人の世界に。

## 其五

宣言　強く　武威けれど、
かぶろ姿の愛らしき
摩利支天女の宣せる如く
王宮の軒　飾ざりし垂氷、
高く　聳ゆる　氷の山の端、

薄紫に　岨　稜　色彩る。

摩利支天

「汝　世界の平和を嫉み、
世界を　堅く氷り凍てさせ
冷たきものとし喜び　樂しむ！
かの寒風に苦しむを見よ、
相搏ち　相食む　何ぞ情なき！
汝は之を樂しみとする！

我　摩利支天　此に來り、
暖かき風　そよ吹き　起り、



堅かりし世は　和らぎ睦び、
汝　力を恃む甲斐なく、
喜び　誇る夢は跡なく、
日月の光　世を輝らし、
平和の光　世に彌り、
春風吹きて　蝶鳥　舞はん、
春雨降りて　花や　開かん。

汝　日月の光を蔽ひ、
暗らませ　氷らせ　凍てさせたるも、
これ　永久の暗夜　氷かは？
我　摩利支天　此に來り、

汝が力　汝が業は
失せ　滅び　消え　去らん。

疾う〳〵　歸へれ　人の　世を去り
日も月もなき　常闇の國、
氷　鎖せる　氷の世界、
汝が嘗て住にし塲所へ。

止

此處は人の世　人の子の里、
汝が止まる世界にあらず。
疾う〳〵　歸れ　汝が住家
氷閉ざせる　氷の國へ！



永久なる　間なき苦しみ、
盡ることなき　惱み來り、
汝　住居を　永久に　失ひ、
活動亡び、力失せんに、
息の根通ひ　生命ある今、
疾う〳〵　歸れ　汝が古鄕へ！

此處は人の世　人の子の里、
疾う　立ち歸れ　歸らずや、
禍來り　苦しみあらん、
歸れ　疾う〳〵、汝が古鄕へ。

風に搖らるゝ黄金の鈴の
微妙じき清き　高き　響きの
遠音になりて　殘れる如く、
女童姿の　摩利支天
破旬を喩し　宣り玉ふ。

其　六

聞ける破旬の怒り　劇しく
ハッタと睨む　眼眩しく
涙流るゝ、されど屈せず、

破　旬



女の童なる摩利支天　聞け。
我は天地を生める身ぞ、
我が心のまゝなる里ぞ、
見よ　我が魔風に　氷らせ凍てさせ
吹き散らし去り　埋め去れるを、
かく大なる力ある身ぞ。
禍ありとか、苦しみありとか、
惱みありとか、面白き哉！
知らずや？我は
苦しみを以て　樂しみとし、
禍を以て　喜とすを。

女の童なる　摩利支天、
汝　知らずや？
我　利劍あり、焼刃匂へり、
我に鋒あり　鋭く尖がる、
我に術あり　奇しき　怪しき、
我に大なる力あるを。
汝が手にせる　そは何物？

摩利支天
「これはこれ　口を縫ふ針、
悪人の　口を縫ふ針
汝が口　縫はんとて



我之を持つ、我之を持つ。

破　旬
針とな？
我　魚ならず　針を恐れず、
我　布ならず　針に縫はれず、
汝が計畫　何ぞ幼稚き、
汝が手段　何ぞ愚けき！

破旬憤然　突立ちあがる、
一陣の風に掀られ起る
茅野焼く火の猛けるが如く、
「女の童」とムンズと抓む、

力餘りて　我が利き爪に
掌刺され　我と傷つく。

支天は依然もとのまゝなる。

波旬　ます〳〵怒り猛けり、
血に染む掌　開くや　否や、
跳りかゝりて　唯一掴み。

支天ば　依然　もとのまゝなる。

いよ〳〵　焦立ち　跳りかゝる——



破旬　ハッタと息塞まる——
摩利支が早業　針うちて
破旬が唇　縫ひとぢ　貫く。

彼菩薩手執針線縫惡寃家口之與眼令不爲害
大摩里支菩薩經

## 其七

氣を焦らち　怒り猛り
破旬が現はす　彼が本相、
天空とも　水とも　分ちかねたる
涯際なき　廣き大海原に
半ば躱くれ　半ば現はれ、

胸より上は　雲に入りたる
大須彌山の峰の頂き
高く聳えし　破甸が頭、

世界の半　覆ふ陰翳の
月日の光　遮り止どめ、
萬古の雪を　絶えず戴き
心なき雲も　い往き憚かり、
翼ある鳥　翔りなやめる
大雪山の峰　見下ろし
息吹きの狹霧は　海をも陸をも
包み　覆ひて　唯濛々、



足蹈む　響き　三千界に
轟き渡り　震ひ　どよめく、
右手に飛び交ふ　彗星
左手に閃めく　大熊星。

右手なる魔扇　サト煽る、
音に崩れ　風に噪ぎ、
大綿津美は波湧き　をどり
四州　石飛び　岩　狂ひ舞ひ、
及の如き冷たき黒風
どう〳〵　荒びて　黒闇々。

膚にあたれば　膚　劈かれ、
石に觸るれば　石　凍て　碎け、
荒れたつ大波　立つまに氷り、
碎かれ　飜りて　氷り合ひ、
斧鉞　降り積み　刀　轉び
列び聳え　亂れ立ち、
峙つ　峰々　窪む　谷。

破旬　肩さき　搖がす　間なく
北光サット　迸り、
天に渡せる色彩る架橋、
亂るゝ吹雪　と絶ゆる刹那、



高低みだれ　亂れし廣野
氷の尖頭　氷の厳隙に
映り　色ごり　光輝燦爛。

猛けり立ちたる　破旬が勢ひ
天を掠め　地を拂ひ
吹きしく風の　誘ひ起せる
吹雪　地を捲き　天を蔽ひて
あはや　三界　刄向ふものなく
粉となり碎け　飛び　散らんとす。

其八

破旬が向へる　東の方、
勢ひ鋭どく　猛けり狂ひ
颯然　吹き行く風の前途に
八荒輝らせる　大光明、
天の梔弓　引き絞る
弓弦離れし　白羽の羽々矢、
閃めき　射られ　眼眩ゆく
たぢろぐ　破旬が耳を劈く
天地　どよめく　大音聲。
日に先ちて　來たる我、
月に先だち　來たる我、
進むは我が前途　我が目的、



かへらぬ我ぞ　歸らぬ我ぞ。
見よ、彼處　破旬が前に
八百由旬の大摩利支天
金色眩ゆき　野猪の背に立ちて
火焔　炎々く　空を焦し
光明　赫々く　四方を輝らす。
劒を擧げて　招く空に
光明みなぎり　到らぬ隈なく、
右往　左往に　化性逃がれ、
怪鳥潜まり　魍魎かくれ、

北光消へて　空は緑に、
赤く　ひらめき　紫がゝり、
黄に　紅に　緑に　樺に、
氷山　氷塊　砕けて光り、
漲り　満ちたる大洪水、
野なく、川なく、湖もなく、
漫々く　汗々く　際なく廣がり、
汪々く　蕩々く　ひまなく漲ぎり、
聳えし山の峯のみ殘り
雲　色どられて錦を晒らし、
鳥は歌へり　しのゝめの曲。



## 其九

金色輝やく　荒猪の齒がみ
怒り　はげしく　猛けり走る
四の蹄に　風卷き起り
怒毛逆たち　眼爛々く
背に突立つ大摩利支天、
右手に翳せる　斬魔劒
燒刄　亂れて　明晃々。
左手を擧げて　高く招けば

卷舌　動き　大風　起り、
天の河原に　星飛び亂れ、
颶母　現はれ　洋　荒れ立ち
掀られ　あがる大激波、
破に呑まるゝ大氷山、
破旬　怒りて　右手に提げ、
手球と拋つ　摩利支が方へ。



飄ふ旗雲　ちぎれ　飛び、
援ぐ天宿　雨と降り、
破旬がうち揮る鋒の閃めき、
黒雲　引き裂き　電光　拋げ出し、
雖雖　垂れ　布き　石礎　とゞろき
雹の礫の　大火矢　小火矢、
漫々く　漲ぎる水を擊ち
泡立ちあがる　大水柱、
波　湧き跳り　水　あがる。

氷山來れど　些とも動せず、
靜かに右手の劒翳せば、
油然　湧きたつ　雲の峯、
閃めく　電光、朱絹　切れ　飛び、
六龍　駕したる　雷車輾りて、
天地動搖めく　大雷雨。

巍々　震へば　山岳　答へ、
手にせる斧は　雲を劈ざき、
頭うたれて　たじろぐ破旬、
足　蹈み直し、勢ひ　劇しく
輕々　抛つ　大氷山。

體にあたれど　少しも搖がず、
摩利支は依然　もとのまゝなる。

破旬　鉾取り　飛びかゝる、
雲の亂れは　左手に　右手に、
電　閃めく　西に、東に、



破旬が黑雲　鉾を降らし
金色眩ゆき支天が雲には
金箭　銀箭　亂だれ　射出され、
矢玉の亂れ　途絶ゆる間
氷山なげうつ　破旬が早業、
山岳　崩るゝ支天が勢ひ、
海に　波湧き　地に地震ふるひ、
叫べば　どよむ　和田原
ふりさけ見れば　波くだけ
金波おどろく　大海に
曈々　一波を蹴　水を開き
現はれ出づる　大日輪。

仰げば　天空に　黄金の光明、
天の八重雲　消えて　あとなく
晴れて　緑の空　高し。

破旬驚き　ためつ望む、
金色流るゝ光明のうちに
青き實冠の佐保姫　立てり。
花の御車　飾り　美々しく
香の烟は　霞　棚引き
花環　花籠　色どり　あやに
鳥舞ひ　蝶飛ぶ　姫の傍に。



破旬　怒りて　鉾執り直し
勢ひ　するどく　立ち向ふ、
金色放てる雲のうち
摩利支　弓をよく引き絞り、
弦音たかく　矢聲とともに
颯と放てる　天の羽々矢
破旬が心の　眞唯中へ。

痛手に喚めく　破旬　目がけ
金毛ふるひ　鼻息あらく
四の蹄に　地を蹴りて
火花を散らし　迫まる猪の

牙はかけたり、破旬は飛べり、
星　亂れ　雲　包み、
遙か北なる　奈落迦の里
紅蓮の氷　閉せる谷へ。

# 第四篇

## 其一

破旬　奈落迦の紅蓮の氷
厚く閉ざせる獄のうちに
絶えぬ苦しみ　間なき惱み



嘗むる世　長し　盡未來際。
鉾劒より、弓矢より、
地に平和を布きたる摩利支、
今や怨怒の相より
還れる姿　優しき女貴、
野山　海原　光明滿ち、
歡喜の聲のさゞめき渡り、
摩利支天子が功績稱へ
讃むる歌ひの節　面白き。

佐保姫

「めぐゝ　和らぐ　我なれど
暴き力に抵抗い得ねば
車　破られ　飾花　萎み
衣　ちぎられ　寶冠　壞さる。

大摩利支天　出ましまさず
暴き力を抑へ　まさずば、
我　永久の嘆きに沈淪み、
我　永久に泣き暮すべし。

あはれ尊き天の御力



破旬を降だし　戒めて、
平和來たる　人の世に
天子の御力　あはれ尊き。

小禽も　蝶も　共に稱へよ、
草木　鳴も　共に讃せよ、
天地　等しく　聲あげ　歌へ、
摩利支天子が　高き功績を。

草木蝶鳥

春の音づれ　喜びあへる
弱き我を苦しむ破旬、

泣けど　叫べど　唯さいなみて、
情なき業の絶えず　間なく、
冷たき風の猛けり　荒さみて、
息づみ潜み　忍び音に泣く。

弱き我等を憐はれみ玉ひ、
上なき強き御力に
利き兵器に　破甸を破り、
世に光明あり　平和あり、
嬉しきかなや！　楽しきかなや！
我等は崇む　大摩利支天！



猛き天子の御力ならで
今日の光明を誰れか　與へむ？
武き天子の神業ならで
今日の暖温を誰れか　來さむ？
強き天子の御庇にあらで
今日の楽しみ誰れか　授くる？

永久なれ　天子の威力、
永久なれ　天子の武運、
永久なれ　天子の光明、
豊さか登れ　天子が力——

## 其二

摩利支天

「汝等が稱ふる平和
我が劒　鉾もて換へし
此平和　いまだ　よからず、
眞誠の平和　いまだ　來たらず。

強き力を　恐れ　憚かり、
爭はず　貪らざるば
いまだ　至れる平和にあらず、



眞誠の和らぐ道にあらず。

此世に何を我とは執する？
此世に何を我物とする？
我を尋ぬるに　我遂に得ず、
已に我なし、我物あるかは？

過ぎ去し方を見るに　已に茫々、
將來を望み見るに　また漠々、
此身　何處より來り　何處へか去る？
何處にか生をうけ、何處へか潛む？

我と他とは　何もて隔て
此と彼とは　何もて分つ？
貪りて　何を　我物とする？
爭ひて　何の　主宰とはなる？

我が眞誠の平和の世界
かくこそと　指さす方に、
千寶磨き　飾れる里の
色ある光明　交はり輝き、
寶樹　綺て　花開らき、
輭風　渡りて　寶鐸響き、
樂を奏でゝ　天童遊び、



歌を歌ひて　奇鳥戯る。

貪らざれば　財　常に足り、
執せざれば　音　常に美く、
溺れざれば　色　常に榮え、
彼も此とに差別なければ
爭ふなく、鬩ぐなく、
我と彼とを隔てざれば
懦りなく　誇りなく、
自々の樂しみ　他を礙へず、
禮あり　亂れず　睦びあふ
此の平和こそ　眞誠の平和、

此の境界こそ　永き久の平和。

佐保姫　蝶鳥等

その平和こそ　願はしき、
かゝる平和の　早く來よかし
童の眠り　安らけき
此に樂しき　春ぞある、
蝶よ　眩ゆき羽に舞へ、
禽　面白き音に唱へ、
鶯　舞へかし　波の上、
姫君　御手をかしたまへ、
共に歌はん　春の曲、
共に舞ふよ　春の舞、
共に稱へん　春の平和を。

（完）



すひかつら終

すひかつら　著作者　中谷無涯

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田むゑ

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　金澤求也

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

明治三十九年二月十二日印刷
明治三十九年二月十五日發行
（實價金七十錢）